

村の比較と、カナダの漁村の協同組合運動を講べることであつた。

国内の事情も余り良く知らない私にとつて、外國で調査するなどというのは大それた考へであつたが、盲、蛇に向とかやらで、押通したらどうやら無事に済ますことができた。運転していた自動車が転覆し、大変なことになつたが早速調査意識をおこして、四つのタイヤが上を向いている自動車をカメラにおさめたこともあつた。これ以外にも、いろいろな意味で貴重な体験をしたので、その想い出を二、三述べておこう。今後の外國調査の参考になると幸いである。

北米漁村調査の あれこれ

(仙 台)

佐々木 徹郎

昨年の夏に、アジア財團の援助の下に、北米の漁村の調査を行うことができた。目的は北米と日本、とくに私の知つてゐる三陸の漁

合衆国ではメイン州のコリアーという村を調査したが、この辺では漁村を見つけることに苦労した。ニュー・イングランドは昔から漁業が盛んなところであり、今でもボストン、グロースターなどは大西洋岸の主要漁港の一つに入っている。ところが漁船、漁民はしても漁村はない。農村でもそうであるが、人は土地、建物を売つて都會その他に移住している。空いた農家、漁家は、サリーマン、大学教授等の中流階級以上の者、退職者などが買つて、住宅、別荘、隠居所などに利用している。であるから、農村では大抵の農地は放置され、雜木林となつてゐる。造林などをやつてゐる人もいるが、農民ではない。たとえばハーバード大学のジンママン教授は土地付の古い農家を賣つて、週末には出掛け、造林をしたり、原稿をまとめたりしている。

漁村も同様で、漁村らしき所と思つてゆくと、住民の大部分は退職者、ナラリーマンで、漁民は二、三人副業としてやつているだけである。北部を除けば、ニューアイランドでは純農村、純漁村といつたものは珍しい。私の場合、幸いゴルトン・オルポート教授の紹介で、比較的荒されていない村を見つけることができた。

調査にあたつて何といつても問題となるのは言葉である。私の調査には通訳などは望めないし、たとえ雇うことができたとしても参加観察の場合、通訳を通してでは不充分である。標準語をマスターしておけば一応役に立つが、その外に漁村調査の場合にはある程度の水産用語、特に魚の名などは知つておいた方がよい。東洋大学の藤木講師の作つてくれた日英漁業用語集は非常に役に立つた。私として困つたのは、アカデア人（ノバスコシヤの仮系カナダ人）の漁村の場合であつた。大抵、英語も通用するが、互同士の会話も、教會の古い筆記の記録も古いフランス語である。ボケット英仏辞典と会話手帳をもつて行つたが役に立たなかつた。つくづく調査のむずかしさを感じた。

面接のときチーブレーダーは役に立つた。マイクを出すと堅くなる場合もあつたが、自分の声が聞けるといふので喜んで話してくれた場合もあつた。古い民謡、民話、ミクマック、インディアンの古い歌なども採録できた。あるとき、録音中、何も知らないお内儀さん

が、鍋の底をこごし洗い出したことがあつた。止めてくれとも云えないし參つたが、これもうちとけて、マイクを意識しない程になつたためであるうと思つて自らなぐさめたこともあつた。テレコはその場ですぐ録音すること以外に、宿に帰つてから聴き取りの内容、その日の印象を吹込んでおくと、後で非常に便利である。とくに筆不精の人々にはおすすめしたい。たゞテープは少々音質を犠牲にしても薄手で長時間録音できる方が便利であつた。

道路が発達し、集落間、住家間の距離が大きくなり、バスの発達していない北米では、調査には自動車は必要品である。メイン州の場合自分で運転して行つたので助かつた。ノバスコシヤではセント・フランシス・サビエール大学の公開講座部の厄介になつた。北米にくらべて日本は調査にとつて非常に便利なところである。市町村役場、協同組合事務所、学校へゆくと、古いものから新しいものまで必要な資料が沢山ある。また種々の統計調査区域と地方行政区域とが密接に関連している。北米ではこうはないかない。戸籍、人口統計、土地、教育、漁業統計は全然別々の役所が司つており、資料を探すに都内、ま

でもないし、またこれが漁業統計の区域と一致していない。しかも各部落は人種、宗教、生産の面で独自性をもつている。そこで、たとえば部落毎の職業別人口、その歴史的推移を調べるためにには、オッタワの連邦統計局へ行つて個票を調べなければならない。ところが未組織であるから部落と部落との境界はないと、統計をとる人の主觀によつて決定されるといつた状態である。統計局では昨年当りから、このセンサス区の厳密な規定を始めたようである。人口だけでも知りたいというのであれば、カトリック教区の場合、教会へゆくと明らかであるし、また郵便局の住民台帳や選舉人名簿も参考になる。たゞカナダで感心したのは漁業統計である。ケベックを除く各地に連邦漁業省の派遣官があり、統計、指導、検査の任にあたつてゐる。どんな漁民でも水揚した魚を販売する場合には漁業省の配布した伝票に年月日、氏名、魚の種類、水揚高、金額を記入する定めとなつてゐる。三枚のコピーピーを、各々漁民、仲買人、政府が保管する。政府の分は、ノバスコシヤの場合、ハリハツクスへ送られて集計される。このようにして漁業統計に関する限り、カナダのものは全くすばらしい仕組となつてゐる。

外国人が調査して、相手が良く答えてくれるであろうかといふのは出発前の私の心配でした。結果としてみると、良い点もあつた。小さなところでは役場はない。あつても役に立たない。さらにセンサスの区域は部落単位は割合にフランスに話してくれた例が多い。

ある漁民などは、過去三ヶ年の漁業収入明細表を見せてくれた。余りしつこく聞くので、途中で、お前は税務署から頼まれて来ただろうといつて難色を示したが、結局全部さらけ出してくれた。またある町は、インディアンが白人に対する不満をおちまけてくれた。土地の人はやはり外国人には気楽に話すといふとも考えられるし、また少々失礼な質問をしても大目に見るといつたこともあり、質問し易かつた。カナダ人と一緒にゆくと、かえつて警戒するようだつた。たゞ私にとつてよくつかめなかつたのは、言葉の端々、表情その他に出てくる情緒的な点である。であるから事実は相当聞き出すことができたが、態度の方はどうもむずかしかつた。私としてはカナダ滞在中、できるだけ土地の新聞を読み、ラジオを聞いたりしたが、固定した質問紙なしで態度調査を行うのは大変な努力がいる。できるだけ文書の利用につとめた。そのため郡史、州史、教会の歴史等はできるだけあつた。丁度、ハーバード大学に滞在中だったので、そこの図書館も利用できた。未開民族とちがつて文書があるので、そのために、フィールドへゆく外に、文献調査することも大切な仕事である。

最後に日本のむらの調査ではまず基礎的データとしての必須のものが家と家との関係である。同族関係・親類関係・姻類関係の調査は、日本の調査では常識である。北米でも本家分家以外の家と家の関係を調べること

はできる。しかし、北米のむらの生活において、家の関係はどのような意味をもつてゐるであろうか。むしろ交友、職場、宗教、民族、人種といった関係の方が、家の関係より大切で、これらが人々の生活を支配している。で、いることとなる。

あるから、家関係の調査に重点をおく日本のやり方は北米ではそのまゝ通用しないことになる。逆に云えば、北米の方法を日本のむらの研究に適用する場合にも大きな問題をもつ